

ジョン・リルバーンの迫害体験と宗教思想：
ピューリタン革命前夜の「多頭のヒュドラ」

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部 公開日: 2019-08-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩井, 淳, 山田, 一雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00026757

ジョン・リルバーンの迫害体験と宗教思想 —ピューリタン革命前夜の「多頭のヒュドラ」—

岩 井 淳・山 田 一 雄¹

はじめに ジョン・リルバーンと「多頭のヒュドラ」

ジョン・リルバーン（1615?～57年）の生涯は、まさに「数奇な一生」であった（図1を参照）。このことは、本稿で順次明らかにしていくが、ピューリタン革命において1640年代のレヴェラー運動を指導したリルバーンは、欧米に限らず、日本の多くの研究者によっても詳細に研究されている²。先行研究で共通していることは、例えば山本隆基氏によれば、革命運動の中でレヴェラーズが生み出した民主主義思想、具体的には自然権・自然法思想、人民主権論、社会契約思想、普通選挙制の主張等が明らかにされ、それらはピューリタン革命の中で最も民主的な思想である³。そのことはピューリタン革命史のみならず民主主義思想の究明に貴重な貢献をなすものとされ、これらの点は多くの研究者によって確認されている。

レヴェラーズの指導者としてはジョン・リルバーン、リチャード・オーヴァトン、ウィリアム・ウォルウィンの3人が挙げられる。その中でも特にリルバーンの初期宗教思想には聖書主義に徹したピューリタニズムへの信奉があり、説教運動に傾斜した典型的な平信徒のものであった。この点ではオーヴァトン、ウォルウィンの合理主義的な思想とは異なり、さらに政治思想においてもオー

¹ 筆者の山田一雄は2008年度に静岡大学大学院人文社会科学研究所経済専攻を修了、その後、岩井淳の大学院ゼミに出席し、ピューリタン革命研究に従事している。本稿は、山田の研究成果を基本とし、それに岩井が加筆訂正したものである。

² 欧米においてはWilliam Haller, *The Rise of Puritanism*, New York, 1938; A. S. P. Woodhouse(ed.), *Puritanism and Liberty*, London, 1938; Joseph Frank, *The Levellers*, Cambridge, Mass., 1955; H.N. Brailsford, *The Levellers and the English Revolution*, London, 1962; John Rees, *The Leveller Revolution*, London, 2016などの著作がある。日本では、浜林正夫『イギリス革命の思想構造』未来社、1966年、渋谷浩『ピューリタニズムの革命思想』御茶の水書房、1978年、山本隆基『レヴェラーズ政治思想の研究』法律文化社、1986年、大澤麦『自然権としてのプロパティ』成文堂、1995年、友田卓爾『レベラー運動の研究』溪水社、2000年など、多くの研究書がある。

³ 山本隆基・前掲書、2頁。

ヴァトンの理性に基づく自然権思想に対して、リルバーンの政治思想は終始、マグナ・カルタによる伝統主義、コモン・ローの思想を遵守しており⁴、前二者とは思想的基盤の相違を特徴としている。しかし、彼らがレヴェラーズを結成し、自然権思想を基盤とする『人民協約』(1647年)を作成して、権力者に立ち向かおうとしたことは、先駆的・画期的なものであったといえる。

リルバーンは1640年代から50年代初期にかけて、イングランド史上最大規模の内戦に遭遇し、闘争に明け暮れ、49年には未曾有の国王処刑で革命が頂点を迎えるという変革の時代の真ただ中にいた。このような時代背景の中、リルバーンは30年代末から50年代初期までの十数年間に投獄や鞭打ち刑にあり、内戦勃発により議会軍に入隊し処刑寸前の危機的場面もあり、また宗教上の相違から尊敬する師や友人と対立、更に彼の議会重視の信条ともなっていた人民の代表である議会から、不法な出版物発行の廉で逮捕・監禁されるという、波乱に富んだ、まさに変革期の象徴ともいえる生涯を送った⁵。

内戦終結と同時に、最も信頼する盟友のオリヴァ・クロムウェルと対立し、憎悪のなかで決別するという、暗い状況にもかかわらず、ロンドン市民の絶大な支援を抛り所として、リルバーンは自由・平等、選挙権の実現など生得権の獲得のために尽力する。そのため、彼の生涯の大半は権力者との抗争となり、長期の投獄に明け暮れることになった。だが、彼は挫折することなく、議会、軍幹部など権力者と事あるごとに対立するが、最後まで粘り強く生得権の確立を目指す生涯を送った。

これまでリルバーンに関して、数多くの詳細な研究があった⁶。それらの多くは、彼の宗教思想や政治思想に関するものである。それも各段階において、例えば、徒弟時代直後に禁制の出版物を出版した罪により逮捕・投獄され、鞭打ち、曝し首の刑を受けることになり、この厳しい迫害の試練によりリルバーンの選民意識、初期宗教意識が醸成されたと多くの研究者（浜林氏、渋谷氏、山本氏等⁷）が説いている。本稿もこの論調には異論なく、むしろ多くの示唆を受けてきた。しかし、リルバーンが、ピューリタン革命前夜に国教会から弾圧さ

⁴ 浜林正夫・前掲書、第五章を参照。

⁵ H. C. G. Matthew and B. Harrison (eds.), *Oxford Dictionary of National Biography*, Vol. 33, Oxford, 2004, pp. 773-783.

⁶ 代表的な研究としてPauline Gregg, *Free-Born John: The Biography of John Lilburne*, London, 1961がある。最近では、Michael Braddick, *The Common Freedom of the People: John Lilburne & the English Revolution*, Oxford, 2018がある。

⁷ 注2を参照。

れたピューリタンとして貫いた自立の信条・行状、強固な気質は、ロンドン市民から熱烈な支持を受け、それ故に、革命前夜に権力を握っていたロード派から激しい弾圧、迫害にさらされた。彼は、それにもめげず、厳しい試練に遭遇するほどに、彼の反骨精神や闘争心は、かき立てられ、権力に挑戦していったと思われる。逆境のなかで、民衆の心を掴み、民衆の支援を得て彼の初期の思想は成長していったのである。

リルバーンは、鞭打ち刑後に釈放されて議会軍に入隊し、死にも直面する戦闘の中で目覚ましい活躍をし、その結果、国王軍に捕らえられ一時は処刑されるかもしれないという危機的な場面と遭遇する⁸。しかし、その後の従軍中に長老派の議会軍幹部の権力志向、怠慢な姿勢、汚職などを目の当たりにする体験を経て、権力者への彼の闘争心は一層かきたてられる。彼は、その後、除隊して違法な出版物を出版したことにより議会によって逮捕・監禁される。

第1次内戦終結後、軍・レヴェラーズと議会派の対立、1647年秋の「パトニー討論」におけるレヴェラーズや一般兵士層と、クロムウェルやヘンリ・アイアトンなど軍幹部との対立があり、憎悪のなかでの盟友との別れなど、生涯の各段階におけるリルバーンの生き方は苦難の連続であり、決して平穏な日々ではなかった。しかし、逆境のなかで市民の様々な疑問や不満等を捉えて、ロンドン市民の共感を呼び、人間らしく生きる権利である生得権の獲得を目指すエネルギー源ともなっていく。そのため以下では、1630年代末の革命前夜のリルバーンの思想に焦点を絞り、厳しい試練にあっても屈することなく、権力者に立ち向かう不撓不屈のリルバーン像を表出することにした。史料としては、1638年の迫害体験に根差したリルバーンの『獣の所業⁹』（1638年）を中心に取り上げる。また、リルバーンの著作と推定される『イングランドの生得権擁護¹⁰』（1645年）を補足的に用いる。

リルバーンが権力者から弾圧され挫折を繰り返しながらも、それに屈するこ

⁸ Matthew and Harrison (eds.), *op. cit.*, Vol. 33, p. 775.

⁹ John Lilburne, *A Work of the Beast*, Amsterdam, 1638 in William Haller (ed.), *Tracts on Liberty in the Puritan Revolution, 1638-47*, Vol. 2, New York, 1933. 以下では1638と略記。本稿では、渋谷浩訳「獣の所業」同編訳『自由民への訴え』早稲田大学出版部、1978年を適宜参照した。

¹⁰ John Lilburne, *England's Birth-Right Justified against all Arbitrary Usurpation*, London, 1645 in William Haller (ed.), *Tracts on Liberty in the Puritan Revolution, 1638-47*, Vol. 3, New York, 1933. 以下では1645と略記。この文書が出版された1645年10月、リルバーンは監獄に収監されていた。同時代の書き込みでは、著者は「リルバーンまたは彼の友人たち」と推測されている。したがって、本文書はリルバーン単独ではなく、仲間との共同執筆と考えるのが妥当であろう。本稿では、渋谷浩訳「イングランドの生得権擁護」同編訳『自由民への訴え』早稲田大学出版部、1978年を適宜参照した。

となく民衆の生得権を獲得するために立ち向かった状況は、古代ギリシア神話に登場する「ヘラクレス（支配者）とヒュドラ（民衆）」に仮託して描いた、ピーター・ラインボウとマーカス・レディカーの共著『多頭のヒュドラ¹¹』の内容と類似している。本稿は、この視点から革命前夜のリルバーンの生涯と思想を取り上げ、考察していく。

ヒュドラは9つの頭を持った怪物で、ヘラクレスがヒュドラの頭の1つを切り落とすと、その切り落としたところから2つの新しい頭が成長するという¹²、多頭の頭を切っても、切っても、生命力を失わない不屈の怪物である（図2を参照）。このヘラクレスとヒュドラの対決は、支配者と被支配者との対立関係に置き換えられる。このような見方を、筆者の岩井は、革命などの変動期に民衆運動を恐れる支配者の見方を反映した社会観であると考える。このようなテーマを、大西洋世界を舞台に追究したものこそ、『多頭のヒュドラ』であると岩井は位置づけた¹³。ラインボウとレディカーは、17世紀以降の大西洋世界の民衆運動をギリシア神話の怪物ヒュドラに仮託し、次のように語っている。

「17世紀初期のイングランドの植民地拡大の初期から19世紀初期の本国の工業化を通して、支配者たちは、ますますグローバル化する労働システムに対して、規制強化の困難さを説明するためにヘラクレスとヒュドラの神話を引き合いに出した。支配者たちは土地を奪われた民衆、移送される犯罪人、年季奉公人、宗教的急進者、海賊、都市労働者、軍人、水夫、アフリカ出身の奴隷を頭数が変化する多頭の怪物に例えたのである¹⁴」。その後、「多頭のヒュドラ」はヘラクレスのような支配者に抑圧・支配されてゆくが、やがて抵抗、ストライキから暴動や反乱、場合によっては革命へと発展していった。ラインボウとレディカーの共著『多頭のヒュドラ』は、ヘラクレス（＝権力者）が支配されるヒュドラ（＝労働者、年季奉公人、宗教的急進者等）の権利を奪ったことにより引き起こされる民衆の抵抗運動が、抑えても、抑えても、権力者に立ち向かうという紆余曲折の過程を描いた作品である¹⁵。

リルバーンの生涯における各段階では、彼は国教会および大主教の弾圧にもめげず、信仰を同じくするピューリタンであるにもかかわらず、急進派である

¹¹ Peter Linebaugh and Marcus Rediker, *The Many Headed Hydra*, London, 2000.

¹² *Ibid.*, pp. 2-3.

¹³ 岩井淳 「「生ける国家」と「モンスター」」『歴史学研究』938号、2015年、38頁。

¹⁴ Linebaugh and Rediker, *op. cit.*, pp. 3-4.

¹⁵ *Ibid.*, pp. 3-4. 本書は、第4章で「パトニー討論」を扱っているが、リルバーンの思想を直接論じてはいない。

がゆえに、ピューリタニズム主流の長老主義から「異端者」として厳しく糾弾される。また内戦中における上官への反抗、不法なトラクトの出版等々は、ある人物の凄まじい闘争ではあるが、同時に権力者から信仰の自由、自由・平等権を勝ち取る、あくなき権利獲得の闘争とも言える。権力者から叩かれても、叩かれても、反抗して市民の権利の獲得（生得権）を目指して戦うリルバーンの行状は抑圧される多くの人々に共通すると思われる。このことはヘラクレスと「多頭のヒュドラ」の戦いと類似している。従って「多頭のヒュドラ」という視点からヒントを得て、徒弟時代から第1次内戦終結に至るまでを中心に初期段階におけるリルバーンの生涯と思想を考察していきたい¹⁶。

1 自立心を涵養した徒弟時代

リルバーン家は、イングランド北部のジェントリの家柄のなかでも中の上に属し、家族は熱心なピューリタン信徒であった。リルバーンの父は決闘によって民事訴訟法の解決を図る熱血漢であった。1615年ころ、ジョンはリルバーン家の次男として生まれた。彼は、父親譲りの闘争心を内に秘めた性格で、学習意欲旺盛な熱血漢、多少ではあるがラテン語を学び、そのことを誇りとしていた¹⁷。

1630年、リルバーンは15歳の時に、ロンドンの毛織物商会で徒弟として働くようになった。この間の状況を「私は6年程、徒弟がずっと親方に仕えるように、忠実に仕えた。身一つ以外には何も持たず、数千ポンドの多額の金を扱ったけれども、……直接にも間接にも1グロートという少額であっても間違いを犯した記憶はない。……いつも私は親方と一緒にだったが、目立った卑しいふるまいのため、これまで汚名を着せられ、とがめられ、横っ面をなぐられたり、なぐったりしたこともあった¹⁸」と述べている。徒弟時代の彼は、毛織物商の業務に精勤し、働く上で様々な難題にぶつかったことは疑いないが、多額の商品を取引するまでに信頼を得た職人として成長していった。

しかし、リルバーンはこの後、民衆に向けた演説を行い、多くの出版物のなかで自身の所説を詳述するようになる。それは徒弟として働いていたときに涵

¹⁶ リルバーンの生涯は、大別して、誕生から長期議会開会までの初期（1615～42年）、議会派として戦い、レヴェラー運動の指導者となった中期（1642～55年）、クエイカー派に改宗して以降の後期（1655～57年）に区分できる。山本隆基・前掲書、55頁を参照。

¹⁷ Matthew and Harrison (eds.), *op. cit.*, Vol. 33, p. 776.

¹⁸ Joseph Frank, *op. cit.*, p. 13.

養されたと、彼は著作の中に書いている¹⁹。また彼は、親方から叱られたことを述べているが、それだけに留まらず、親方から虐待を受け、そのためにロンドン市の役人の前に親方を連れて行ったことを告白している²⁰。

本論に入る前に、イングランドのギルド制度について、ごく簡単に触れておきたい。ギルド（同業者組合）には親方、職人、徒弟という三身分があり、職種としては毛織物工業、ガラス工業、陶器、石鹸、商業等があり、それぞれの職種ごと職人・徒弟は修業を積むことにより、親方への道は開かれていた。だが、親方は競争が激化することをおそれて、不当に高い権利金を取ったり、技術試験制度を厳しくしたりして親方への道を狭くし、自らは親方衆による会社法人をつくり、職人層を締め出し、都市の行政権を独占しようとした。このため職人衆は親方衆に抵抗し、ギルド内部に彼等だけの独立した組織をつくり、親方に対抗しようとしていた²¹。ギルド制度は近代産業の勃興により17世紀後半以降衰退していったが、それは成立の過程からもわかる通り、構成員相互の競争による利潤獲得を制限し、価格は伝統的に個々の生産者の標準的生活費によって決定するという閉鎖性の強い独占価格維持の傾向があった²²。ピューリタンたちが、このようなギルド制度の矛盾、価格違反の行為に厳しい批判の目を向けた背景には、ピューリタン急進派の平等や公正を重んじる思想があり、市場における売買取引は厳格な倫理規定に基づいて、個々の生産者の公正な競争によって決めるべきというピューリタンの公正価格論があった²³。

閉鎖的な身分制をもつギルド制度下の毛織物商会で働いたリルバーン青年は、どのような考え方を持っていたらうか。明確な所見はないが、彼が仕事の傍ら宗教・法学・政治・経済に関する書籍を精読していたという実績、毛織物輸出に従事するが、特権会社の独占権によって阻まれるという苦い体験、後に書かれた『イングランドの生得権擁護』（1645年）の中で特権会社の独占を激しく攻撃している記述²⁴等々から、身内の利益を優先する閉鎖的なギルドの体質には疑問を抱いていたと推測される。ましてや、敬虔な聖書主義を貫くリルバーンは、思想的にも特権的ギルドを容認できなかつたと思われる。

¹⁹ *Ibid.*, p. 13.

²⁰ *Ibid.*, p. 13.

²¹ 浜林正夫『イギリス市民革命史』未来社、1959年、34頁。坂巻清『イギリス・ギルド崩壊史の研究』有斐閣、1987年も参照。

²² 竹内敏幹「ピューリタンの教会規律と資本主義の精神」水田洋編『増補 イギリス革命—思想史的研究—』御茶の水書房、1976年、39頁。

²³ 同上論文。

²⁴ John Lilburne, *op. cit.*, 1645, pp. 8-10.

リルバーンは徒弟として親方の下で毛織物商の修業に努めていたが、実態は絶対服従で、休日以外は厳しい制約にあった。友人との交流は許されず、虐待は日常化し、そのために職人・徒弟の不満は鬱積し、争いは絶えなかった²⁵。リルバーンは職務上の不当性を訴え、反抗することに留まらず、法的な手段にまで訴えようとしたのである。リルバーン青年の内心は正義と気概の精神、特に父親譲りの反骨の闘争心が、徒弟時代から醸成され、たびたび発揮されていたといえる²⁶。

一方、彼は、仕事の傍らの余暇の時間には、聖書やルター、カルヴァンといった宗教改革者の著作を読み、16世紀のメアリ女王時代の迫害を描いた『殉教者列伝』を好み、トマス・カートライト、ヘンリ・バートン、エドモンド・ロージャーといったイングランドの聖職者などによって書かれた著作を愛読していた²⁷。特に旧約聖書の歴史的な事柄、「イザヤ書」と「ダニエル書」、また新約聖書の「ヨハネの黙示録」などから、後の宗教的思想の核心ともなる重要な事項を学んでいた²⁸。また、リルバーンの思想を実質的に高めたのは、親しい友人である徒弟たちとの交流であった。彼らとの交流を通して、神への祈りを広く説く説教運動を進めた。

「私は幾人かの若者と知り合いになった。彼らは、神の恩恵にあずかるため、真面目に教会に出席していた。……そして、私と同じく徒弟である彼らとは、安息日にしか交流する機会がなかった。朝6時に始まる午前の説教に出席することが、私たちのいつもの習わしだった。……私たちは、儀礼の始まる一時間前に一緒に集まることや、祈り、主から授かった経験についてお互いに話し合う時を過ごすこと、また、これまで聞いた説教を復唱することを約束した。ほどなくして、私たちは聖書の一部を読み、そこから神が喜んで私たちにやり遂げさせることを語り合った²⁹」。

リルバーンは徒弟仲間である若者たちと知り合い、議論したことを生き生きと語っている。この中には後にバプティスト派の指導者となるウィリアム・キップフィンがいた。その後、独立派の説教運動を推進する過程で巡り合った2人の若者、バプティスト派のエドモンド・ロージャーや、リルバーンのパンフレット出版を支援したウィリアム・ラーナーとも親しく交際し、友情を育んでいる。

²⁵ Joseph Frank, *op. cit.*, p. 13.

²⁶ *Ibid.*, p. 13.

²⁷ *Ibid.*, p. 13.

²⁸ *Ibid.*, p. 13.

²⁹ *Ibid.*, p. 14.

リルバーンはこれらの交際によりカルヴィニズムの信仰や教義の詳細を学ぶことができ、彼の拠って立つピューリタニズムを書籍から学び、宗教的な確信を得て信仰上の基盤を修得している。この頃のリルバーンはキリストの旗の下に聖霊の戦士として生きる明確な自画像を描いている³⁰。

リルバーンがロージャーなどから感化されているとき、更にロージャーから、ピューリタン聖職者であるジョン・バストウィックを紹介され、リルバーンは彼の最も忠実な弟子となった。バストウィックは厳格な長老教会主義者で、激しくカトリシズムを攻撃していた。バストウィックはリルバーンとの初期の関係について、「彼は誠実で宗教的であったが、単なる田舎者で、とても乱暴者だった。そのため彼はうまくお辞儀ができなければ、上品に帽子を取ることもできなかった³¹」と記述している。

総括すると徒弟時代におけるリルバーンは、

- (1) 宗教書籍に留まらず、マグナ・カルタ、「権利の請願」など国法に関する書籍を読み、後になって『獣の所業』および裁判、議会の証言でこれらの法律を引用していたことからわかる通り、宗教、政治、経済に関わる数多くの書を広範に読書していた³²。リルバーンの知的好奇心の旺盛さが想像される。
- (2) 特に宗教・政治思想を形成する上で原動力ともなる、聖書、ルター、カルヴァンの著作、『殉教者列伝』、旧約聖書や「ヨハネの黙示録」など多くの宗教書に親しんでおり³³、このことが後に強い自我意識、宗教思想の核心ともなる原型を作り出し、内心の陶冶を育んでいったものと思われる。
- (3) リルバーンの初期宗教意識を培ったのは、1636年、徒弟末期に説教運動を通して同じ徒弟仲間であるウィリアム・キッフィンやエドマンド・ロージャーといった勤勉な若者たちと知り合い、コングリゲーションという宗教集会に参加して祈りを捧げ、聖書を読み、語り合ったことである。同じ徒弟、若者同士という気兼ねのない雰囲気の中で、緊密な交流により修得された宗教意識は彼の血肉となり、ピューリタニズムを基調とする宗教思想の原型を醸成したと思われる。

更にリルバーンの宗教意識を高めたのは、ロージャーやラーナーからカルヴィニズムの知見を得て、ピューリタニズムの信仰を学び、「キリストの戦士」とし

³⁰ *Ibid.*, p. 14.

³¹ *Ibid.*, p. 14.

³² *Ibid.*, p. 13.

³³ *Ibid.*, p. 13.

ての確信を得たことである。それに加えてバストウィックと交流したことにより、国教会聖職者の腐敗、ピューリタン弾圧に対する激しい怒りを感じ取った。この段階におけるリルバーンは、多くのピューリタンと交流し、幅広い思想を獲得した。予定説に立つ厳格な規律主義に基づく正統的ピューリタニズムの長老主義者（バストウィックなど）と、寛容な反律法主義を重んじる分離派は、教義、活動の違いはあっても相違を乗り越え、ロード派批判の立場で協力していた。いやむしろ、バストウィック、プリン、バートンが、国教会の弾圧により「耳そぎ³⁴」に処せられるという1637年6月の迫害の実情をみて、リルバーンは国教会の大主教たるロード打倒の先兵としての決意を固めたと思われる。

徒弟時代のリルバーンは徒弟仲間³⁵と共にCongregationalismに参加して、敬虔な神への祈りを捧げ、聖書を読みあう平信徒であった。また、徒弟という労働の経験を通してギルド制度の矛盾を実感し、親方と対立し、不正に立ち向かう正義感に燃えた闘争心を作り上げていった。ギルド制度の閉鎖性が自ら信奉するピューリタニズムと相容れないことを察知し³⁶、そのことが、後になって『イングランドの生得権擁護』において独占的営業を攻撃する彼の主張の根拠になったと思われる。

ラインボウとレディカーの「多頭のヒュドラ³⁷」を転用すれば、基盤となる頭部を支える身体が、徒弟時代のリルバーンにおいて形成されたといえる。徒弟時代を終えて、彼は、鞭打ち・曝し台上の刑、上司との確執・仕打ち、不法といわれるパンフレットを出版するなどして、逮捕・監禁され、長期の投獄等々、様々な迫害・試練を受けるが、それらに屈することなく立ち上がる。その強さともいえる信仰心、正義感・キリストとの一体性などを阻む権力者の壁が現れ、それを打破すべく抵抗・反抗心を燃やしていく。その背景には、徒弟時代に、誠実な業務、神への信仰、忍従、ピューリタンの師・仲間との交流などを通して、厳しい試練に直面しても、それに屈することのない対抗心、闘争心を醸成していったことがあるだろう。この点は、「多頭のヒュドラ」が頭を切

³⁴ *Ibid.*, p. 15.

³⁵ ジェントリの風習として家を相続できるのは長男だけであり、相続できない次三男は外に活路を求めるしかない家制度があった。次男以下の者はリルバーンのように徒弟となるか、さもなければ、軍人や聖職者、商人となり、植民地に移住するなど様々な機会をうかがった。R. H. トーニー著、浜林正夫訳『ジェントリの勃興』未来社、1957年、11頁を参照。

³⁶ ギルド内部には親方、職人、徒弟という三つの身分があり、2、3年勤めると親方への道は開かれていたが、親方は競争激化を恐れて、高い権利金を取ったりして門戸を閉ざし、争いは絶えなかった。浜林正夫『イギリス市民革命史』、38頁。

³⁷ Linebaugh and Rediker, *op. cit.*

断されても、それに耐え、打ち勝って次の頭を成長させる力を体の中に蓄えていたことと類似するだろう。

2 鞭打ち刑と曝し首の刑の所産たる『獣の所業』

リルバーンは、1638年4月18日、大きな転機を迎える。彼は、非合法の出版物（バストウィックの書物）を出版した罪および宣誓拒否の罪のため、星室庁裁判所から逮捕・監禁され、フリート監獄からウェストミンスターまでの道中、鞭打ち刑を受け、さらにウェストミンスターで曝し首の刑を受けることになった（図3を参照）。この時の経験を記したものこそ、『獣の所業』であった。刑を受ける心情について彼は、「その朝、私の魂は靈的な慰めによって、極度に高められていた。このような神の支援を私の心の中に感じていたので、受刑による卑劣な刑罰を私は全く問題にならないと感じた³⁸」と表現した。リルバーンは、彼が刑場に向かう途中、イエス・キリストが数々の迫害を受けた情景と重ねて、弾圧に耐えていった。彼は回心前に既に自身の選民意識を自覚していた³⁹。そのことが鞭打ち刑、曝し首刑による心身が砕け散る凄惨な刑に対して、リルバーンがキリストとの一体感を鮮烈にして耐え、選民意識を深めていったのである。彼は曝し台上の演説で、国教会を悪魔と関連付け、激しく攻撃して、国教会側からの迫害を受けるが、それにひるむことなく立ち向かっていった。

『獣の所業』の先行研究では、厳しい迫害によりリルバーンがキリストとの結合、一体感により選民意識をもつに至った状況を詳述している。そこで、本稿は視点を変え、彼の迫害体験を通して、鞭打ち刑における民衆との出会い、廷吏との会話における強固な信念、曝し台上の演説での国教会への激しい闘争心、反ロードの急先鋒にさせた原動力について考察し、従来の説では、あまり触れられなかった迫害体験の社会的側面を解明してみたい。

「ヘラクレスとヒュドラ」の視点で見えていくと、当時の状況は国王チャールズ1世に仕えたトマス・ウェントワース（1640年以降はストラフォード伯）と、カンタベリー大主教ウィリアム・ロードが専制政治の支柱であった。大主教ロードを支持する国教会聖職者は「ロード派」と呼ばれ、ピューリタンを弾圧して

³⁸ John Lilburne, *op. cit.*, 1638, p. 4.

³⁹ 渋谷浩・前掲書、66-67頁。渋谷氏は、ジョン・パニヤンの回心が贖罪体験であるのに比べ、リルバーンの回心は何のプレもない聖化体験であったと記している。

教会と王国を強権的に立て直そうと図っていた⁴⁰。このことは権力者に例えられるヘラクレスに対して、リルバーンに例えられる「多頭のヒュドラ」が不死の頭を持ち上げて強力に立ちはだかるが、ヘラクレスは棍棒で頭を叩き落として平穏な社会を築こうとしている様相と類似している。他方のリルバーンは鞭打ちの刑という厳しい迫害により、心身が喪失するかのような状況の中にも必死に耐えて、キリストと一体になり、選民意識を自覚して、権力者打倒に立ち上がろうとしている。このことは、何個かの頭を叩き落とされても耐えて、不死の頭を核として新たに立ち向かう生命力を生み出して、巨人ヘラクレスの打倒に立ち上がるヒュドラそのものである。鞭打ち刑、曝し台上のリルバーンの受刑は、ヘラクレスの棍棒でヒュドラが頭を叩き落とされても耐え、新たな頭が立ち上がるように、激しい迫害に会えば会うほど、新たな生命が形成されていくことと類似している。

(1) 鞭打ち刑と民衆との一体化

リルバーンはウェストミンスターまでの路上で激しい鞭打ちの刑を受けるが、当初は、この刑がそれほど過酷なものとは思ってはいなかったし、鞭打ち刑は曝し台で受けるものと思っていた⁴¹。しかし、現実には彼の想像と違い、当初から肉体も砕け散るほどの過酷なものとなった⁴²。この思い違いは、逆にイエス・キリストとの一体感を意識させることとなり、彼の選民意識を強固にし、信仰心に徹する純粋な一念を確固なものとする。同時に激しい国教会への怒りを強め、憎悪の念を増幅させるという、彼の内心では複雑な二面の相克がなされていったものと思われる⁴³。

リルバーンは曝し台までの道のりで、鞭打ち刑の厳しい試練によって選民意識を獲得していったといえる。このことは浜林氏や渋谷氏、山本氏、またウッドハウスやフランクといった国内外の多くの研究者によって、リルバーンの初

⁴⁰ ピューリタン革命前夜の状況については、岩井淳『ピューリタン革命と複合国家』山川出版社、32-35頁を参照。

⁴¹ John Lilburne, *op. cit.*, 1638, p. 4.

⁴² I must confess, if I had had no more but my owne natural strength, I had suncke under the burden of my punishment. *Ibid.*, p. 6.

⁴³ リルバーンは、受刑前に過酷な制裁を予想していなかった。しかし、現実には肉体も砕け散るほどの厳しい処刑に、イエス・キリストの厳しい受難をイメージ化し、一体化して殉教者の精神で耐えるのであるが、この極限的な体験は、対峙する国教会への憎悪の念を増していったと思われる。

期宗教思想が形成されたと詳述されている⁴⁴。

そこで本稿は視点を変えて、リルバーンが民衆との出会いにより彼らの心情に訴え、民の心を掴む状況について所見を述べたい。曝し台に着くまでの道程で最初の刑を受ける時、知り合いの青年がやってきて、言った。「喜んで苦難を受けるように、あなたの信念を傷つけないように、勇気ある決心をしなさい。あなたは良き信念のために迫害されているのですから⁴⁵」。リルバーンはこの言葉に勇気づけられ、名誉だと感じるようになった。フリート通りをへてチャリング・クロスまで来ると、熾烈な刑により記憶も喪失しそうな彼に、幾人かの友人が「勇気を出し給え⁴⁶」と彼を激励した。ウェストミンスター近くの曝し台までやって来ると、多くの見知らぬ群集が彼の迫害の場面を見て、彼のために祈り励ましてくれた。それに答えるように、リルバーンは述べた。「我が同志よ、私は神法に対しても、国法に対しても、国王や国に対しても、この刑を受けるに値する罪を少しも犯してはいないのです。主教たちの残忍さと悪意の的になって苦難を受けているだけなのです⁴⁷」。受刑上の曝し台に着くまでに彼は、多くを民衆に語り掛け、激励を受けているが、民衆は、リルバーンの厳しい迫害の状況をどうみていただろうか。

リルバーンが鞭打ちの刑を受ける前年の1637年6月にW・プリン、J・バストウィック、H・バートンの3人がロード体制を厳しく攻撃した廉で、曝し台上で耳そぎの刑を受けたが、彼らは台上から民衆に弾圧の不当性を訴え、多数の民衆の共感を呼び覚ましている。このような前例があり、さらに当時の状況は説教運動によりピューリタニズムが民衆に広く行き渡り、反ロード闘争は民衆の支持を得ていたのである。このように民の心に反ロード闘争の盛り上がっている時の利を得て、リルバーンは権力者側の迫害と、その不当性を巧妙に訴える効果を上げたであろう。彼の街頭での行為は、ロード体制打倒のアピールを民衆に強烈に訴えたといえる⁴⁸。一方、民衆もそれに応えてリルバーンを激励し、国教会への憎悪の念が生まれ、1640年の「根こそぎ請願」では1万5,000人のロンドン市民の署名となって現れてくるのである⁴⁹。リルバーンは迫害という心

⁴⁴ 注2を参照。特に山本隆基・前掲書、15頁。

⁴⁵ John Lilburne, *op. cit.*, 1638, p. 5.

⁴⁶ *Ibid.*, p. 6.

⁴⁷ *Ibid.*, p. 7.

⁴⁸ 『獣の所業』に現れる、リルバーンの友人、無名の多くの民衆の彼への激励、それに応える彼の国教会批判の言葉は民の心を捉え、国教会批判の機運を盛り上げていったと思われる。

⁴⁹ 今井宏編『世界歴史大系 イギリス史2』山川出版社、1990年、194頁。1640年11月、国教会制度の弊害を指摘し、その廃止を求めて、「根こそぎ請願」の運動が起こり、1万5,000人のロンド

身の損傷と引き換えに、民衆の心を巧みにつかみ取ったといえるだろう。

他方、彼は、星室庁裁判所の廷吏との会話では、厳しい口調で廷吏に反論している。「この国の法律は異教のローマ人の法よりも悪質で残酷である⁵⁰」。路上の鞭打ち刑によりリルバーンの心身は極限に至るまで痛めつけられる状況がよくわかる。また逆境に耐えて宗教的な意識を強固にしていく様子とともに、国教会および当時の司法制度に敢然と立ち向かう彼の反骨精神がうかがえる。

（２） 曝し台上的演説

過酷な鞭打ち刑を受けた後、リルバーンは曝し台上に立った。「主は、お力をもって私を支援してくださり、御霊によって私を導かれ、あなた方に私の心の内を語らせようとしている⁵¹」。リルバーンは神に彼の内心を告白する形式をとりながら、神の知恵と加護を信じて、民衆に向けて語り始めた。

主教たちは国教会の職務は神法に基づくものであると主張するが、その主張にバストウィック、バートン、プリンという３人が反対したために、彼らは「耳そぎの刑」で受難した⁵²。特にバストウィックは、大主教ロードの邪悪さを示し、ロード派打倒に燃えていた。リルバーンは、「この高貴にして、尊ぶべき博士を心から愛する。彼は神の真理と栄光のために戦う人であり、私は、彼の名誉のために我が命と血を捧げようと思う⁵³」。曝し台上でのリルバーンの第一声は、発禁の書であるバストウィックの著作をオランダで印刷した廉で逮捕されたことの不当性を大衆に訴えている。さらにバストウィックについても、彼が主教の職務と邪悪さを指摘したことにより逮捕・迫害された不当性を、同時に強調した。先にも記したように、バストウィック、プリンなどに対する残忍な「耳そぎの刑」は民衆の反発を呼び起こし、反ロード闘争を高めるが、リルバーンはこの３人の刑罰を引き合いに出し、民衆の共感を巧みに呼び寄せている。

リルバーンは宣誓を求められた時、「今や、私はこの宣誓を罪深く、不法なものとして拒んだ。……主教たちは神の親愛なる聖徒にして、下僕なる人々を乱暴に痛めつけ、悩ませ、破滅させようとしている。この宣誓は、また国法にも反しており、……我が国王の統治二年に公布された「権利の請願」にも明確に違反している。更に神法にも絶対に違反している。なぜなら、神法は人が他人

ン市民の署名を議会に提出している。

⁵⁰ John Lilburne, *op. cit.*, 1638, p. 9.

⁵¹ *Ibid.*, p. 14.

⁵² *Ibid.*, p. 14.

⁵³ *Ibid.*, p. 14.

を告発することを求めず、もしもそのことで告発したなら、告発を証言する2、3人の証人を必要とするからである⁵⁴」と宣誓拒否の理由を明確にしている。

更に彼は、主教の職務の偽善性を暴いている。「イングランドの国教会が真の教会であると証するための、彼らの最高で最強の論拠は、主教がローマ教会の聖なる（つまり不敬なる）お方の直系の継承者であるというものである。……だから、自ら自白するように、彼らは教皇から受けた権力と権威によって存続している。そのため彼らの職務は神からではなく、悪魔からのものである⁵⁵」。リルバーンは、国教会主教たちの職務は悪魔に由来するとし、彼らをローマ教皇と通じた裏切り者として痛烈に批判している。

リルバーンは、続けて訴える。主教に任命された聖職者や廷臣によって、善良な市民が偶像崇拝や霊的な軛の下で「良心の自由」を侵されており、神の偉大な御名と真理が踏みにじられ冒瀆されている。それらを食い止めるために、「イエス・キリストの果敢な兵士のごとく、勇敢に決心せよ⁵⁶」と、リルバーンはキリストの信徒に呼びかけている。

曝し台上の最悪の状態にもかかわらず、リルバーンは更に高揚していく。「私は、神の御名により天と地の神の霊と力に助けられて、あなた方に語っている。思慮分別を欠いた軽率な言葉ではなく、熟慮した冷静な言葉で私は語っているのである。……私は、偉大にして強力な司令官であるイエス・キリストの旗の下で、戦う兵士である⁵⁷」と、リルバーンは固い決意を語る。「私はジェントルマンの息子である。……世間の流儀に従えば、私は、満足した豊かな生活を送れるだろう。それにもかかわらず、キリストの大義のため、彼に仕えるため、私は父・友・富・快樂・安らぎ・満ち足りた生活・欲望に別れを告げたのだ⁵⁸」。リルバーンは心の安らぎである家族や友人との縁を断ち切り、清貧で禁欲な生活に至る悲壮なまでの覚悟をして、キリストの大義に従おうと決意している。

リルバーンは曝し台上の演説の始めに「私は、ここで不名誉と恥辱の場所に立っている。ところが、私にとってはそのような場所ではない。私は、ここを歓待して迎えるキリストの十字架として、かつキリストへの告白の証として認め、歓迎する⁵⁹」と民衆に語り掛ける機会を、大きな喜びをもって表明してい

⁵⁴ *Ibid.*, pp. 12-13.

⁵⁵ *Ibid.*, p. 15.

⁵⁶ *Ibid.*, p. 18.

⁵⁷ *Ibid.*, pp. 19-20.

⁵⁸ *Ibid.*, pp. 20-21.

⁵⁹ *Ibid.*, p. 9.

る。リルバーンにとって曝し台上の演説は次の三つの意味で重要性を持っているだろう。

第1に、ウェストミンスターまでの道のりで、過酷な受刑を民衆に直接見せることにより、リルバーンへの彼らの同情心を高めるとともに⁶⁰、迫害する権力者への憎悪の念を喚起するという二重の効果が考えられる。それに加えて曝し台上の演説では受刑の不当性に言及し、身の潔白を明らかにし、ロード派の誤りを指摘している。

第2に、国教会のロード大主教および廷吏は国法・神法に違反しているにもかかわらず、バストウィック、プリンなどが国教会に抵抗したことを理由に、逮捕・監禁し迫害している。彼自身に関しても不法な出版物を出版した廉により、また宣誓を拒否したことにより、同じく逮捕・監禁・刑罰に及んでいるが、これまた明らかに国法・神法に違反していると彼は訴えている。更にリルバーンはそれだけに留まらず、国教会はキリストの教会ではなく、悪魔に由来する邪悪な教会であると痛烈に批判している。

第3に、リルバーンが民衆に想いを馳せるのは、彼の選民意識から説明できる。彼が曝し台までの残酷な刑に耐えたのは、いやむしろ喜びを持って受け入れたのは、イエス・キリストの厳しい処刑と一体化することであった。それはアダムの原罪による人間の宿命に対して、原罪を贖うために十字架刑に処せられたキリスト⁶¹とリルバーンは一体化することによって選民意識を自覚し、合わせて救済を確信する。即ちイエス・キリストに服従することによってのみ、人間の罪は救われるのである。原罪のある人間による人間への迫害、それは抑圧であり不平等ではなかったか。彼にとって、もう一つの選民意識は、支配者から政治的・宗教的に抑圧され、虐げられた人民大衆と自らを同一視することであった⁶²。リルバーンは次のように述べた。「私は、イエス・キリストの下僕の中で最も卑しく、価値のない者の一人に過ぎないが、私という道具が野卑で、弱々しいからといって、あなた方に引き渡されていることを軽蔑しないでほしい。なぜなら、主のお力がより良く現れんがため、主は幾度となく弱い道具をもって大いなることをなさるからである⁶³」。彼の意識の中には、政治的・宗教的に弱い人、抑圧された人への共感があり、自らを「弱々しい」存在とみなし、

⁶⁰ *Ibid.*, p. 7.

⁶¹ 山本隆基・前掲書、18頁。

⁶² John Lilburne, *op. cit.*, 1638, pp. 4-8.

⁶³ *Ibid.*, p. 19.

民衆と同化しつつ、彼らの解放を目指す見方があったのだろう。

以上のことから、リルバーンの曝し台上の演説は、直接的に政治思想を表明していないが、迫害という体験を通して民衆に具体的に語り掛け、民衆の心を掴む効果を最大限に発揮している。鞭打ち刑という心身ともにダメージを受ける受難によりリルバーンは、イエス・キリストの受難の状況と一体化し、神の救済を信じ、厳しい試練に耐えて選民意識を自覚するのである。

また彼は、曝し台上の演説で国教会が国法・神法に違反し、ローマ教会に従属し、悪魔と通じる「反キリスト」であると、妥協の余地ない徹底的な国教会批判を展開している。この演説で、リルバーンはバストウィックを敬愛するが、その後、内戦が始まると、前者は独立派、後者は長老派という主義主張の違いが明白になり、同床異夢、お互いに激しく非難し合うこととなる。いずれにしても鞭打ち刑、曝し台上の迫害により、リルバーンは選民意識を表明し、自らの宗教思想の根源的なエネルギーを確立した。それとともにこの過程において彼の肉体が損傷されんばかりに痛めつけられた体験は、大主教ロードおよび権力者への強力な反抗エネルギーへと連なっていくだろう。

(3) 曝し台から監獄へ

曝し台から獄に戻ったリルバーンは、獄長との会話で、「主教について私は、彼らの人柄を否定しているのではなく、主教の職務に反対しただけである」と答えている⁶⁴。曝し台上で述べたのと同じ「主教の職務は悪魔に由来する」という説明を獄長とのやりとりで繰り返している。

獄長に釈放を依頼したが、リルバーンは主教の職務に反対し、その職務は悪魔からのものだとして述べた。獄長は、国教会を誹謗中傷する彼の態度が分かり、後日、リルバーンが重禁固刑に処せられると告げた⁶⁵。『獣の所業』の最後近くで、彼は述べた。「もし主が私に語る自由をお与えになれば、私は間違いなく信頼する神のお力によって、生きても死しても、イエス・キリストの良き兵士の武器を勇敢に用いるであろう⁶⁶」。ここには、主の力を信じ、主と一体化することにより、厳しい迫害を乗り越えようとするリルバーンの強い意志がうかがえる。これこそ、神に選ばれ、神と一体化した選民意識であろう。

徒弟職人を終えて市民となったリルバーンは、不法なパンフレットを出版し

⁶⁴ *Ibid.*, p. 25.

⁶⁵ *Ibid.*, p. 28.

⁶⁶ *Ibid.*, p. 30.

た罪により、鞭打ち刑、曝し首刑という厳しい試練と遭遇した。しかし、この迫害に彼はイエス・キリストと一体化することにより、試練を克服して選民意識を確立するに至った。迫害体験は彼の初期宗教思想を形成するうえで重要な転機だったといえる。また、この迫害によって、民衆に寄り添い、彼らと同化し、支持されることの大切さを学ぶことになった。

しかし、そのことは、またリルバーンの心身を極度に蝕むこととなり、大主教ロードおよび国王側近への憎悪の念となり、ますます彼は、権力者に対する反抗心を強めることとなった。『獣の所業』の中で、彼は主教たちの権力と職務は悪魔に由来するとし、それは虚偽の職務であると執拗に批判している⁶⁷。彼らは神の民を欺き、神を著しく汚し、大きな苦痛を与えている。彼ら（聖職者たち）は「反キリスト」であり、不法な職務を利用して、神の民に説教する。説教する国教会とその聖職者が有能であればあるほど、人々に大きな害を与える⁶⁸。国教会は神の真理に背き、神を冒瀆し、敬虔な人々を傷つけていると、国教会への敵愾心を露わにするのである。

鞭打ちの刑、曝し台上の刑は、リルバーンにとって厳しい試練となり、それにより選民意識を自覚する決定的な転機となるが、この刑罰の過程で彼は民衆の心を掴む絶妙な手腕を発揮していた。惨い刑を受けながらも民衆に呼びかけ彼らから激励を受け、彼らの心理を引き寄せている。リルバーンが民衆の心を掴み、共感を呼び、権力者に対峙させた一連の行動は、意図せずして政治的な意味をもったのであろう。そのため、彼の行動は政治的な作用を引き起こし、権力への抵抗の火蓋を切ったと言えるのである。

国教会の大主教ロードおよびロード派と、反国教会のピューリタンとの対立抗争は1640年代初頭まで続き、リルバーンは急進派のピューリタンとして、国教会打倒の急先鋒となっていた。徒弟を終えてから彼の行状は、選民意識を自覚し、民衆の側に立ち、民衆とともに権力者に立ち向かおうとしていた。鞭打ち刑、曝し首刑は、彼の生涯における最初の試練であり、ラインボウとレディカーの『多頭のヒュドラ』を振り所とすれば、大主教ロードの迫害により、リルバーンなど敬虔なピューリタンが身体を打たれ、頭を切られ、打ちひしがれているようにも見えるが、内面ではその試練をばねとし、たくましく新たな頭を成長させようとしていたのである。

⁶⁷ *Ibid.*, pp. 14-15.

⁶⁸ *Ibid.*, p. 17.

3 議会軍の兵士として

(1) 釈放後の活動

リルバーンは、鞭打ち刑後の2年間、過酷な獄囚生活が続いたが、長期議会でのオリヴァ・クロムウェルの嘆願により、1640年11月に釈放される⁶⁹。釈放された彼は、獄中生活のうっ憤を晴らすかのようにロンドン市民として活動する。彼は叔父の資金援助により醸造業を開始し、1641年9月、結婚した⁷⁰。束の間の幸せな期間であった。

リルバーンは長期議会開会後の1641年8月には、議会にもよく通い、議会の宣言や改革法案を詳細に学んでいる⁷¹。そのことが後の『イングランドの生得権擁護』に生かされることになる。しかし当面、彼の主たる目標は国教会のカンタベリー大主教ロードとストラフォード伯（かつてのウェントワース）の二人を打倒することであり、そのための示威運動を展開していた⁷²。リルバーンはストラフォード伯の弾劾訴追に格別な関心を寄せていた。リルバーンの釈放前ではあったが、1640年5月の短期議会解散後、10月に選挙が行われ、活発な選挙運動が展開され、市民の政治意識は高まり、改革派の議員が多数選ばれ、長期議会開会となった。彼らは改革意識に燃えていた⁷³。そのためストラフォード伯やロードなどが、ピューリタンを弾圧し強権政治を先導したという反逆罪で、彼らを弾劾しようとしていた⁷⁴。一方、ロンドン市民も示威運動を繰り返し、改革派の運動を強力に支持した。特にストラフォード弾劾に向けてリルバーンが先導した市民の示威運動は強力な後押しとなっていた⁷⁵。リルバーンと市民の活動が共鳴し、一体化が図られている⁷⁶。

その間にも、リルバーンの知的好奇心は少しも衰えることはなかった。彼は、

⁶⁹ Matthew and Harrison (eds.), *op. cit.*, Vol. 33, p. 775.

⁷⁰ Joseph Frank, *op. cit.*, p. 26.

⁷¹ *Ibid.*, p. 26. リルバーンは、1642年夏の後半に議会の宣言書および三年議会法、関税廃止法等々を学び、国王の不法な統治の下で人々が苦悩していることを把握して、議会軍に入隊した。

⁷² *Ibid.*, p. 26.

⁷³ 今井宏編・前掲書、192-193頁。長期議会は、国王の恣意的な支配を阻止するために、1641年2～8月にかけて改革立法を成立させた。それらは、無議会政治の再現を阻止するための三年議会法、議会の同意のない解散への反対、関税・トン税・ポンド税の廃止、星室庁裁判所廃止・高等宗務官裁判所の廃止などであった。

⁷⁴ 同上書、193頁。

⁷⁵ 同上書。

⁷⁶ 同上書。

ヘンリー・パーカーの『国王陛下の最近の回答と発言の若干に関する考察⁷⁷⁾』を読み、人民の信託を受けた議会が、国王に権力を信託しているが、その国王が信託に背けば議会は国王に抵抗する権利を持つ⁷⁸⁾、という議会主権論を学んでいる。このことが議会側の論拠になっていることを認識し、それが後の人民主権論を基底とする『人民協約』の起草にも影響を与えていると思われる⁷⁹⁾。

リルバーンの宗教思想の原点は、教会や為政者の制約を受けることなく、信徒を集めるCongregationalismへの自発的な参加により、徹底した聖書主義を貫くピューリタンの分離主義に立っていた。山本隆基氏はリルバーンの初期宗教思想について、彼は「国教会闘争へ全力を傾注し、国家や政治の問題にはまったくかかわっていない⁸⁰⁾」と叙述している。もちろん、リルバーンの初期宗教思想は、山本隆基氏が指摘しているように、神の民からなるCongregationalismの樹立を唱え⁸¹⁾、強烈なピューリタニズムに支えられ、宗教に徹した行動様式を示しているように思われる。しかし、鞭打ち刑および曝し台上の演説における、国教会への激しい非難や、ロンドン市民に迫害の示威運動を示し、行動を通して民衆の目に訴え、宗教的な意識を浸透させるプロパグанд的な彼の活動は、結果として宗教思想を内に秘めた政治活動を展開していたともいえるだろう⁸²⁾。

クロムウェルの支援により釈放され、自由人になったことにより、革命前の国政を支配したストラフォード伯やロード大主教に対する打倒の念も解き放たれ、リルバーンは直接的な攻撃へと転じることとなる。彼のロードおよびストラフォード打倒の念が一気に顕在化するのである。

「多頭のヒュドラ」の視点から見ると、リルバーンが、弾圧されたロード大主教など巨大な権力者に対して、痛めた傷を癒し耐えて、権力者を倒す秘策を練っていたと思われる。このことは、ヒュドラが多頭の頭を1つ切られたが、知恵

⁷⁷⁾ Henry Parker, *Observations upon some of his Majesties Late Answers and Expresses*, London, 1642.

⁷⁸⁾ Joseph Frank, *op. cit.*, p. 26.

⁷⁹⁾ A. S. P. Woodhouse (ed.), *op. cit.*, p. 317. 「人間は全て生まれつき平等で、権力、気品、権威、偉大さにおいて平等である。生まれによって何人も他人を超えて権威、支配、威厳のある権力を持つものはない」。この基本理念は、1646年ころの著作John Lilburne, *The Free-mans Freedom Vindicated*, London, 1646によって表された。

⁸⁰⁾ 山本隆基・前掲書、48頁。この点に関して、山本氏は次のように述べる。「リルバーンの場合には、その他に、彼の思想にみられる聖俗峻別の考え方が重要な要因になっていると考えられる。……彼にあっては世俗政府civil governmentは、教会と明白に区別される」と記述している。同上書、48頁。

⁸¹⁾ 同上書、40-43頁。

⁸²⁾ Joseph Frank, *op. cit.*, p. 26.

を得てヘラクレスに対抗する秘策を練り、新たな頭を持ち上げて、立ち向かおうとしている姿と二重写しになる⁸³。

ただし、ここで留意すべき点は、リルバーンが、神の大義を熱心に説き、議会への期待を少しも減退させていないが、国王に対して服従の意を表していることである⁸⁴。この段階のリルバーンは国王に対して消極的服従の立場に立っている。内戦前の国内の混乱、即ち神の真理にもとる国王による権限の濫用があった。その原因として、ロード大主教やストラフォード伯といった廷臣による権力の乱用、腐敗墮落があったのであり⁸⁵、従って彼の攻撃の主目標は国王側近に向けられたのである。このようにリルバーンは消極的服従説をとっているが、釈放されてロンドン市民と数回の示威運動を行い、国政改革に向けて指導的役割を果たした。この点については、国王大権の内容に踏み込んでいることから、現実には服従説を乗り越えた政治的活動を進めていることに注目できる⁸⁶。長期議会で三年議会法、解散反対法、議会の同意なき関税を禁止する法など、多くの改革立法が成立したが、「根こそぎ請願」などは国教会制廃止まで踏み込んだ請願であり、半数近くの議員はこの改革に対して慎重であった⁸⁷。リルバーンは示威運動の中核として活動しており、その活動は、さらに急進化していった。

(2) 議会軍の兵士

リルバーンは2年間程の市民生活をへた後、内戦前に議会に敬意を表して次のように述べている。「私の手にある剣で議会人の危機を救うために戦う⁸⁸」。彼は1642年の夏の終わりに議会の重要な宣言を知り、国王派の不正な統治に怒りを覚え、同年10月、議会軍のブルック卿の率いる連隊に入隊してキャプテンに任命される⁸⁹。入隊するや10月23日にエッジヒルの戦いに参戦する。内戦の前半において国王軍優勢の戦況の中で、彼は勇敢に戦ったが、数週間後、国王軍

⁸³ *Ibid.*, p. 26.

⁸⁴ *Ibid.*, p. 26. この詳細について、山本氏は内戦前のリルバーンの意識について、「ヨハネの黙示録」を引用して、国王に対する彼の態度を次のように述べる。「国王の権威は神によるものであり、だから、私が国王に服従しない場合は、私は神にそむき、罪をおかし、神の命令を破ることになる」。山本隆基・前掲書、49頁。

⁸⁵ *Ibid.*, p. 26.

⁸⁶ 多くの議員は国教会制度の弊害を除去しようとしていたが、主教制廃止までは考慮していない。

⁸⁷ 今井宏編・前掲書、193-194頁。

⁸⁸ Joseph Frank, *op. cit.*, p. 26.

⁸⁹ *Ibid.*, p. 26.

によって捉えられ捕虜となり、オクスフォードに送られる。そこでの裁判によって国王への反逆罪で処刑される危機的な状況にあった⁹⁰。しかし彼の妻エリザベスの決死の伝言がオクスフォードに送られたこと⁹¹や、議会軍の戦闘能力に国王軍は脅威を感じ、処刑直前に議会軍と国王軍との捕虜交換により、彼は、処刑を免れ一命を取り留めた⁹²。リルバーンは個人的には国王に服従していたが、捕虜期間中に大逆罪として厳しい尋問を受けたことによって、国王の統治に対して疑問を抱くようになり、国王軍への戦闘意識を一層増幅させていったものと思われる⁹³。

リルバーンは釈放されてロンドンに戻り、民衆から歓迎を受けて帰宅する。彼はエセックス伯から提示された300ポンドの寄贈を断り、「私はイングランドの自由と平和が回復するのを見るまでは、たとえ1日8ペンスの貧しい生活であっても闘わなければならない⁹⁴」と決心していた。彼はイングランドが自由で平和な社会になることを希求して、新たな活動への決意を固める。

リルバーンは1643年10月7日、クロムウェルの勧誘により、マンチェスター伯の東部連合軍に入隊し、エドワード・キング大佐の下で歩兵少佐として任務に就いた。彼は、有能な将校として44年5月にマンチェスター伯の竜騎兵隊付中佐に昇進した。竜騎兵隊の目覚ましい活躍により議会軍は勝利し、リルバーンは、ヨークシャのティクヒル城で、降伏をめぐり国王軍と重要な交渉をする任務を担っている⁹⁵。リルバーンは能力があり情熱をもっている将校ゆえの結果として、上司と様々なトラブルを起こすこととなった⁹⁶。1644年の夏の始めにマンチェスター伯の命令に反抗して捕らえられ、彼はリルバーンを絞首刑にすると脅迫したこともあった。このときにはクロムウェルが介入して難を逃れたが、リルバーンは2人の将軍の激しい争いに巻き込まれることとなる。この争いの背景として、リルバーンの信頼するクロムウェルは戦争を続行すること

⁹⁰ Matthew and Harrison (eds.), *op. cit.*, Vol. 33, p. 775. 捕虜となったリルバーンは処刑されることになっていた。

⁹¹ *Ibid.*, p. 775.

⁹² Joseph Frank, *op. cit.*, p. 27. リルバーンに対して国王派による投獄中の尋問は過酷なものであった。しかし、彼は議会軍の圧力、彼の熱い神の信仰、議会軍の衰えない戦力は、彼の処刑を防御してくれるだろうと確信していた。彼の当初の見方は正当化された。

⁹³ Matthew and Harrison (eds.), *op. cit.*, Vol. 33, p. 775. 捕虜交換により家に戻ったリルバーンは醸造所を低廉化で売り議会軍に参加している。

⁹⁴ Joseph Frank, *op. cit.*, p. 27.

⁹⁵ Matthew and Harrison (eds.), *op. cit.*, Vol. 33, p. 775.

⁹⁶ Joseph Frank, *op. cit.*, p. 27. その後、彼は貴族院でマンチェスターと、庶民院でクロムウェルと争いを起こすこととなる。

により内戦の決着を望み、他方のマンチェスターは君主政の下で政治的安定を取り戻し、長老教会主義を確立するために国王軍と和解し、戦闘行為を遅延し曖昧な状態で終結することを望んでいた⁹⁷。議会軍は勝利目前にして、その内部の将軍間の争いという不統一をさらけ出し、戦闘を長期化させることとなる。

議会派の将校としてリルバーンは、彼の上司であるキング大佐、マンチェスター伯と対立し、その後、貴族院や庶民院の長老派議員とも激しく衝突することとなる。特に前二者との対決の焦点は、第1に、キング大佐が過激な長老教会主義者であったことである⁹⁸。ピューリタン急進派のリルバーンにとって、長老教会主義は教義、活動の面からも厳しい対立関係にあり、さらにキングが非国教徒を強権的に弾圧する行為を目の当たりにして、彼がキングを容認できないとし、憎悪の念を持つに至った。またリルバーンにとって許せないのは、大佐が軍の資金名目で地方の人々を騙し財産を横領したことであった⁹⁹。彼がキング大佐に激しい怒り覚え、敵意を示したのは当然である。第2は、リルバーンにとって不運なことに、入隊した東部連合軍の将軍がマンチェスター伯であったことである。伯はキング同様、長老派に属し、その言動は権威的であり、しかも優柔不断な戦術は彼が最も忌み嫌うところであって、伯と激しく口論した。伯はリルバーンが降伏した城を接收しようとしたとき、彼をひどく叱責し懲戒処分しようとした¹⁰⁰。また自分の功績を挙げるために議会に、あたかも自分の実績により勝利したかの如く報告する厚かましきであった。リルバーンは、クロムウェルが戦争の勝利に向けて努力しているのに対して、マンチェスター伯の優柔不断な戦争終結を長引かせる利敵行為に、伯への不信と憎悪の念を募らせていった。そのため、1644年11月25日、クロムウェルが庶民院に伯を戦争遅延、優柔不断の罪で告発した時に、リルバーンはクロムウェル側の証人となって、マンチェスター伯弾劾に向けて活動したのである¹⁰¹。

⁹⁷ Matthew and Harrison (eds.), *op. cit.*, Vol. 33, p. 776.

⁹⁸ *Ibid.*, p. 777.

⁹⁹ *Ibid.*, p. 777.

¹⁰⁰ *Ibid.*, p. 777.

¹⁰¹ *Ibid.*, p. 777. この点に関して渋谷浩氏は、マンチェスター伯が議会軍の司令官として優柔不断であるだけでなく、故意に戦機を失するなど利敵行為があるとして、クロムウェルが伯を弾劾した時、リルバーンは重要な証人となったことを説明している。渋谷浩・前掲書、74頁。

おわりに 残された課題

1642年8月に内戦が始まるや、リルバーンは議会軍の兵士として2回、彼は自分の生死も顧みずに活動しているが、従軍している2年半ほどの間の前半と後半に、貴重な二つの体験をしていた。前半（1642年10月～43年5月）のブルック卿の連隊にリルバーンが所属していた時には、1642年10月のエッジヒル、翌月のブレントフォードの戦いに参戦し、議会軍の危機を救い、そのあげく国王軍に捕らえられ捕虜となり、死刑直前に議会軍と国王軍の捕虜交換により九死に一生を得る。渋谷浩氏は、「先年の第一回の獄中生活に較べれば、期間は短かったし人心を扇動させる劇場的な受難の場面もなかった。しかし国王軍に寝返えれば莫大な賞金を与えるという誘惑と、転向しなければ処刑するという脅迫の板挟みに陥った彼自身にとっては、文字通り死ぬ思いを味わわされた虜囚体験だったに違いない¹⁰²」と述べている。リルバーンの生涯は政治的にも宗教的にも権力者との抗争に明け暮れていたが、彼は、内戦の前半に権力者であった国王軍と対抗し、兵士として勇敢に戦い、議会軍のために献身的に尽くした。

後半（1643年後半～45年4月30日）の彼は、東部連合軍に入隊し、長老派の議員であるマンチェスター伯やキング大佐の下に参じたが、醜い横領行為などを目にし、指揮官および長老派と対立した。戦況は議会軍の有利に動く中、マンチェスター伯の優柔不断な遅延行為による利敵行為は、若きリルバーンの敵愾心をあおることとなる。また強固な長老教会主義の思想をもつキング大佐による、非国教聖職者に信仰の自由を認めない独善行為や、軍のために集められた財産を横領するなど腐敗した不正行為は、リルバーンの最も嫌悪するところであり、彼らと折り合えるはずもなかった。内戦の後半に浮かび上がるのは、上官の権力を笠に着た行為に敢然と立ち向かう彼の勇敢な姿である。

鞭打ち刑、曝し台上の迫害は、一方ではリルバーンが聖霊の力を意識し、イエス・キリストと一体となることにより選民意識を自覚することとなる。他方では、沿道の民衆の同情心を集め、演説から国教会に対する憎悪の念を民衆に浸透させるという政治的とも言える対応をしていた。

内戦によってリルバーンの行動は、より活発となる。国王に対する消極的服従は変わらないものの、国王軍を打倒するための決死の行動は「多頭のヒュドラ」の中で、意気軒昂、力強く頭を持ち上げて、ヒュドラであるリルバーンが、

¹⁰² 同上書、73頁。

ヘラクレスである国王軍に立ち向うが、やがて力尽き倒れるという危機的な場に直面している。まさに頭が切断されるかもしれない。しかし、ヒュドラ＝リルバーンはエネルギーを蓄えて、再度ヘラクレス＝国王軍に立ち向かう。そのような二重写しの様相を描くことができる。

この後、リルバーンは更に厳しい試練に直面することになる。長老派が進めた「厳粛な契約と同盟」への署名を拒否して軍を離れ、ロンドン市民の生活に戻るが、それも束の間、『プリン氏への手紙』というパンフレットを不法に出版して逮捕・監禁される。この逮捕の不当性にオーヴァトン、ウォルウィンらが抗議して、レヴェラーズが結成され、リルバーンは指導者の一人となった。その後もパンフレットを出版して、逮捕と投獄が繰り返されるが、その期間中にニューモデル軍の兵士の支援を得て、リルバーンは『イングランドの生得権擁護』というパンフレットを刊行し、さらにレヴェラーズの指導者として『人民協約』起草の中心人物となった。だが、パトニーにおいて軍幹部との討論で、自然権思想、人民主権、普通選挙権など民主主義に連なる主張がなされるものの、当時としては過激な思想であったが故に、挫折することとなった。

「多頭のヒュドラ」の頭は権力者によって断ち切られるが、身体の奥深くで耐え、新たな頭を成長させて立ち向かう。リルバーンも厳しい迫害を経て選民意識を自覚するようになるが、その後の生涯で平穏な日々はなく、次々と新たな困難がおそいかかる。しかし、ピンチをチャンスに変え、窮地を脱し、その時代にあった、より民主的な社会を生み出そうとしたのである。

本稿の議論は、以上のようにまとめることができる。ただし、本稿には、まだ残された課題があることを認めなければならない。何よりも、用いた史料が限定されており、実証的な議論が不足している。さらに言えば、中心的に用いた『獣の所業』の分析においても、深められなかった論点が2つほどある。それは、第一に、『獣の所業』の中に「ヨハネの黙示録」に基づく千年王国論が明確に見られること、第二に、『獣の所業』をよく読むと、千年王国的発想のために、ヒュドラ＝リルバーン、ヘラクレス＝国教会というだけでなく、ヘラクレス＝リルバーン、ヒュドラ＝国教会やカトリック教会となる逆転現象が存在することである。本稿の議論を、より豊かにし、今後の可能性を広げるために、以下ではこの二点を補足しておきたい。

第一に、『獣の所業』は、すでに先行研究が指摘するように、ピューリタン革

命以前から高揚する千年王国論の影響を受けていた¹⁰³。1638年のリルバーンは、次のように述べる。「ここに神ご自身の御声が選民のすべてに——彼らは長い間この反キリストの奴隸的権力と国のもとで生きていたのだが——その権力と国への服従と隷属を止めることを、ついに命じておられる。我が兄弟よ、私たちはすべて、今という今、主教どもの偶像崇拜的で靈的な軛のもとで大変危険で恐るべき状態にある。……だから、あなた方をお願いする。恐怖と卑怯によって、あなた方は神にひどい冒瀆が加えられるのを放置したがために、また来たらんとする時のために、悔い改めよ。イエス・キリストの勇猛な兵士のごとく、勇敢に決心せよ。彼のこの靈的な戦いを雄々しく戦え。この戦いで、彼の兵士のある者たちは、すでにその血やその他のものを幾分か失ったのである。この黙示録を学びたまえ。あなた方は、ここに不法の秘密がすっかり暴露され、解き明かされているのを見出すだろう。そしてまた、かたや子羊とその下僕ら、かたや竜（悪魔）とその従臣の間でいかに激しい靈の戦いが行われてきたかということ、またこれからも幾度か戦われねばならないことを読むであろう¹⁰⁴」。まさに、数年後に迫った内戦を予期したような文章である。リルバーンにとって、キリストの王国は「来たらん」としており、主教たちとの戦いは、そのためのものであった。千年王国論の主張は、『獣の所業』の全体を貫いており、この時期の彼の思想の基調といつてよいだろう。

第二に、上記の引用文でリルバーンは、「子羊」と「竜（悪魔）」の戦いを強調した。宗教改革以降、後者は、ローマ教皇やカトリックと関連づけられることが多く、とくに「獣」や「バビロンの淫婦」と表現された。17世紀イングランドの千年王国論では、ローマ教皇と同一視される「獣」の打倒が積極的に説かれたが、リルバーンも、その例外ではなかった。「今や、私は彼らすべての前で主張する。彼らの職務は神の法どころか（彼らはそう言うのだが）、むしろ悪魔の法である。……しかし、我が兄弟よ、あなた方が最もよく納得して下さるためには、黙示録の9章と13章をお読みいただきたい。いなごが底なしの穴から出てくるのを読むだろう。彼らはいなごの一味である。黙示録のその箇所では彼らは生き生きと描かれている。また、以下のことも、そこで読むだろう。獣（これは教皇またはローマの国と政府のことである）が、竜（悪魔）から権力と地位と大きな権威を授けられたということである。それ故、教皇の権威は

¹⁰³ この点については、山本隆基・前掲書、31-35頁、岩井淳『千年王国を夢みた革命』講談社、1995年、48-49頁を参照。

¹⁰⁴ John Lilburne, *op. cit.*, 1638, p. 18.

悪魔に由来するものである。主教と彼らの印刷物によって造り出された連中は、(彼らがあらゆる種類の人々に対して振う) 権威と権限と権力をローマに由来すると主張するのである¹⁰⁵」。

リルバーンの「獣」理解は、当時とすれば一般的だった。そして「獣」は、図4のように「多頭のヒュドラ」として描かれることが多かった。図4は、1588年にロンドンで出版されたヒュー・ブロートン『聖書の調和』の中に登場する「バビロンの淫婦」である¹⁰⁶が、その姿はローマ教皇を載せた「多頭のヒュドラ」に他ならない。リルバーンは「獣」を公然と批判し、その権威と権力に戦いを挑んだ。この構図は、ヘラクレスとなった彼が、「多頭のヒュドラ」として描かれる「獣」に対峙するものである。本稿では、ヒュドラ＝リルバーン、ヘラクレス＝国教会という構図を採用した。客観的には、そう言えるかもしれない。しかし、リルバーンの主観において、彼は、「多頭のヒュドラ」に立ち向かうヘラクレスを自認していたようにも思われる。いずれにしても、このような逆転現象を生むところが、ピューリタン革命前夜の面白さである。これまで迫害されてきた者が、神から力を授けられ、主人公となり「獣」を倒そうとする主客逆転の物語が、そこには存在するのである。「多頭のヒュドラ」は様々なものに仮託されて語られるがゆえに、多様な解釈が可能であろう。

(2019年5月31日)

¹⁰⁵ *Ibid.*, pp. 14-15.

¹⁰⁶ K.R. Firth, *The Apocalyptic Tradition in Reformation Britain, 1530-1645*, Oxford, 1979, p. 157.



THE LIBERTY of THE FREEBORNE
 ENGLISH-MAN, Conferred on him by the
 house of Lords: June 1646



*Gaze not upon this shaddow that is vaine,
 But rather raise thy thoughts a higher straine,
 To GOD (I meane) who set this young-man free,
 And in like straits can eke deliuer thee.
 Yea though the lords have him in bonds againe,
 LORD of lords will his just cause maintaine.*

図1 ジョン・リルバーンの肖像画 (1646年のパンフレットに付されたもの)
 出典: William Haller (ed.), *Tracts on Liberty in the Puritan Revolution, 1638-47*, Vol. 3, New York, 1933,
 title page.

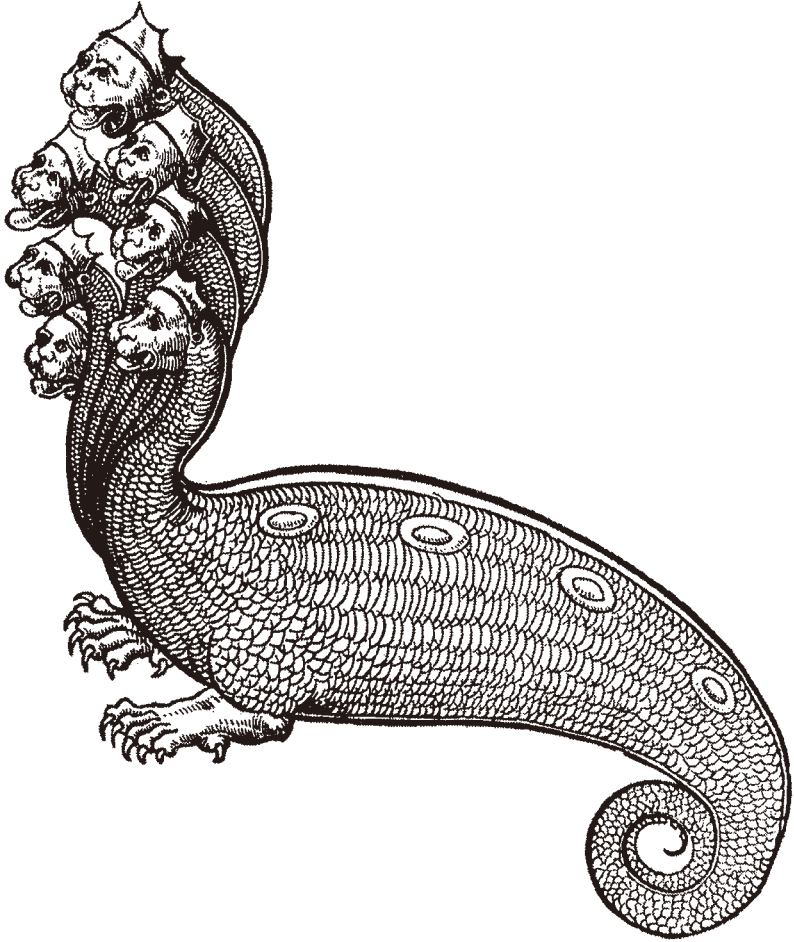


図2 17世紀初めに描かれた「多頭のヒュドラ」

出典：Edward Topsell, *Historie of Serpents*, London, 1608.

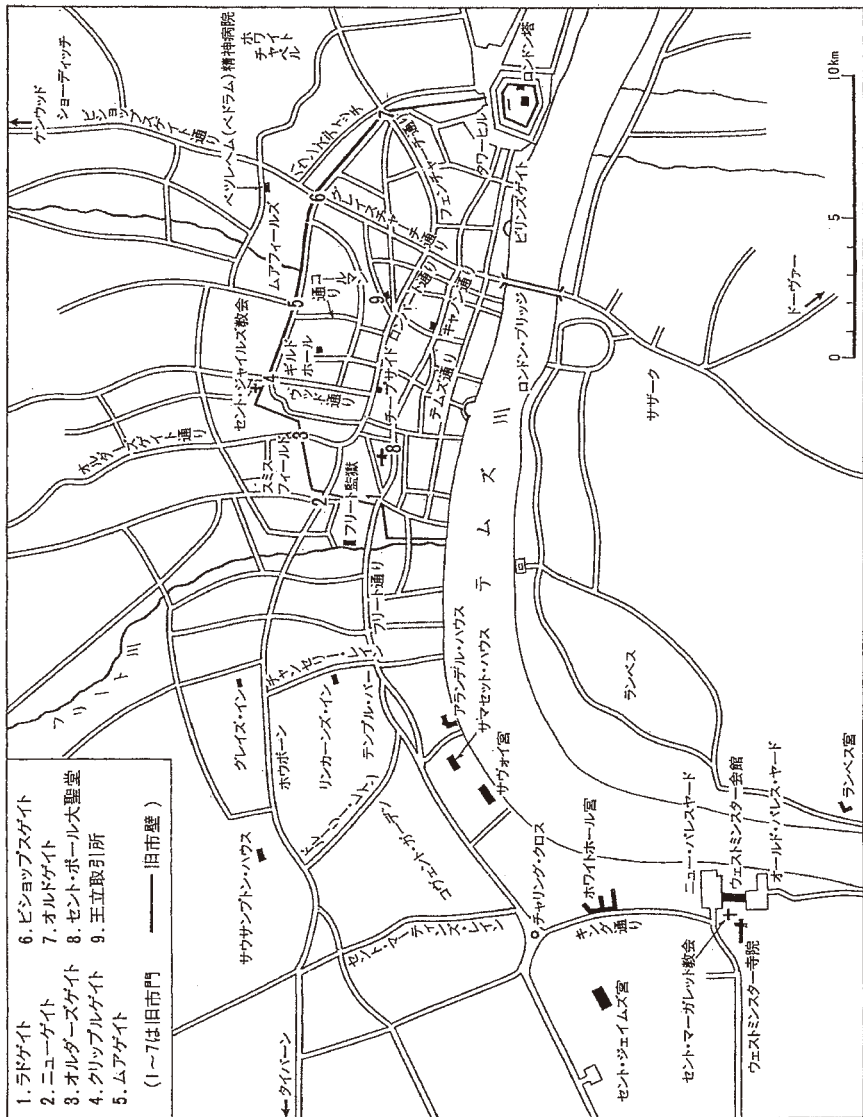


図3 17世紀のロンドン

出典：岩井淳『千年王国を夢みた革命』講談社、1995年、179頁。



図4 16世紀末に描かれた「バビロンの淫婦」

出典：Hugh Broughton, *A Concent of Scripture*, London, 1588.